

修士論文（要旨）

2013年1月

実習における看護学生の関わりが高齢入院患者の主観的 QOL に及ぼす影響

指導 芳賀博 教授

老年学研究科

老年学専攻

208J6001

飯室淳子

## 目次

### 第1章 緒言

#### 1.1 研究の背景

##### 1.1.1 高齢入院患者を取り巻く社会の変化

##### 1.1.2 高齢入院患者に対する看護学実習の現状

#### 1.2 先行研究

### 第2章 研究の目的

#### 2.1 研究の目的

#### 2.2 研究の意義・重要性

### 第3章 研究の方法

#### 3.1 QOL 評価に用いる尺度

#### 3.2 調査対象者

#### 3.3 調査方法

#### 3.4 調査内容

#### 3.5 分析方法

#### 3.6 倫理的配慮

#### 3.7 調査期間

### 第4章 結果

#### 4.1 調査対象者の属性

#### 4.2 調査対象者個別の状況

#### 4.3 学生受け持ち前後の比較

#### 4.4 学生受け持ち後の実習への肯定・否定感と主観的 QOL の比較

#### 4.5 学生受け持ち後のインタビュー内容分析

### 第5章 考察

### 第6章 本研究の限界と今後の課題

### 第7章 結論

### 参考文献

### 資料

## 要旨

高齢入院患者と看護学生との関係について、実習の関わりが高齢入院患者自身の QOL に及ぼす影響に焦点をあてた研究はない。しかし、実習の場において、実習中の受け持ちを引き受けた高齢入院患者が、以前に増して生き生きと療養生活を送っている様子を度々目にすることから、もし、看護学生との関わりが高齢入院患者自身の心身における活力維持に効果を及ぼすことが明らかになれば、何より実習中の受け持ちを引き受ける高齢入院患者自身にとっての利点に繋がると考え、本研究に取り組んだ。

調査対象者の選定においては、高齢入院患者の主観的 QOL に及ぼす影響が大きいと考えられる要因は可能な限り除外することが望ましいと考え、①療養病院あるいは一般病院の内科慢性期病棟に入院している高齢入院患者、②看護学生の実習中の受け持ちとなった患者、③意思疎通が良好で、調査の質問内容の認知機能に支障のない患者、④本研究への協力の承諾が得られた患者、これら①～④全てに該当する患者を調査対象と設定し、看護実習を受け入れている3つの一般病院に入院中で協力が得られた14名の高齢入院患者のうち12名の調査結果を分析した。

調査方法は、看護学生の受け持ち開始前と受け持ち終了時の各時期に各質問紙調査や面接によるインタビュー調査を行い、測定値の変化やインタビュー内容の分析を行った。調査には健康関連 QOL 尺度である SF-36、GDS-15、Barthel Index などの指標を用いて行った。

結果、受け持ち開始前と受け持ち終了時の主観的 QOL の比較としては、SF-36 の2つの因子「身体的健康度」「精神的健康度」はいずれも受け持ち開始前より受け持ち終了時のほうが平均得点が上昇しており「身体的健康度」は有意な得点の上昇が認められた( $p<0.05$ )。「身体的健康度」を構成する下位尺度のうち「身体機能」「体の痛み」の2つの尺度で有意な得点の上昇を認めた( $p<0.05$ )。GDS-15 は受け持ち開始前より受け持ち終了時のほうが有意な得点の減少を認めており( $p<0.05$ )、うつ傾向は改善していた。Barthel Index は、受け持ち開始前より受け持ち終了時のほうが有意な得点の上昇を認めた( $p<0.05$ )。

学生受け持ち終了時の実習に対する思いについては、受け持ちを終了して欲しくないとか肯定的に受け止めている患者が75%を占めていた。学生受け持ち終了時の実習に対する肯定・否定感と実習終了時の主観的 QOL の相関をみたところ、「身体的健康度」「身体機能」「全体的健康感」「活力」で、肯定感が高ければ主観的 QOL も高い傾向が見られた。

インタビュー内容の分析では、高齢入院患者の実習に対する思いが肯定的か否定的かに関わらず「学生に対する思い」「患者自身にとっての思い」は共通カテゴリーに挙がっていた。異なる点としては、実習を肯定的にとらえている患者からは、学生から受けた様々なケア(足浴、血圧測定、など)についての説明が述べられていたが、否定的にとらえている患者からはそれらが全く述べられていなかった。

実習前に比べて、実習終了時に主観的 QOL 指標の得点上昇がみられたことおよび実習に対して肯定的な回答が多かったことは、看護学生の受け持ちが高齢入院患者の主観的 QOL の高まりに寄与していた可能性が考えられる。

本研究では、調査対象数が少ないことによりデータの一般化は困難であった。今後、コントロール群の設定も視野に調査対象数確保に努め、看護実習と高齢入院患者の QOL との関連を明確に位置付けられるよう取り組む必要性があると考えられる。

## 参考文献

- 1)厚生労働統計協会：国民衛生の動向・厚生指標 増刊，58(9)，436，2011.
- 2)内閣府：高齢社会白書 平成23年版，13-20，2011.
- 3)大平奈津美、伊藤まゆみ：老年看護学領域における基礎看護技術教育の現状と課題 技術到達度表の分析から，群馬パース大学紀要，10，67-74，2010.
- 4)小野晴子、逸見英枝、金山弘代他：複数の患者受け持ち導入による統合実習 A の到達度 臨床実践能力の修得に向けて，新見公立大学紀要，32，7-14，2011.
- 5)奥津文子、片山由美、赤澤千春：効果的な臨地実習指導方法の検討Ⅱ－学生の自己効力感と実習目標達成度との関連からの一考察－，京都大学医療技術短期大学紀要，23，23-32，2003.
- 6)竹内美千代、山田さか江：看護学生の臨地実習における実習満足感と自己効力感との関連性，長野県看護研究会論文集，30，82-84，2010.
- 7)相野さとこ、森山美知子：終末期看護場面におけるシミュレーション学習法を用いた実習前の学生のレディネス向上と臨床判断の育成に関する効果の検討の試み，日本看護学教育学会誌，21(2)，45-56，2011.
- 8)松波美紀、箕浦とき子、温水理佳他：高齢患者の“持てる力”の活用を強調した老年看護学実習の検討 実習記録の分析から，老年看護学，12(2)，60-67，2008.
- 9)神谷智子、小林尚司、西片久美子：認知症高齢者を受け持った学生に対する実習指導の検討－学生が感じた気がかりの分析を通して－，日本赤十字豊田看護大学紀要，6(1)，65-69，2011.
- 10)片岡久美恵，中川史子，木村三津子他：臨地実習で看護学生の受け持ちになることに対する患者の意識，日本看護学会論文集 看護教育，36，164-166，2005.
- 11)片岡久美恵，大場広美，中川史子他：臨地実習で看護学生の受け持ちになることに対する患者の意識 第2報，日本看護学会論文集 看護教育，37，431-433，2007.
- 12)斎藤一江，石橋明子，窪田好恵他：学生が受け持つことを依頼する際の患者への説明の実態(第2報)－臨地実習における患者への倫理的配慮－，日本看護学会論文集 看護教育，36，155-157，2005.
- 13)高橋あけみ：高齢患者にとっての看護実習を受け入れたことへの意味づけ，桜美林大学大学院修士論文，2009.
- 14)古谷野亘：QOLなどを測定するための測度(1)，老年精神医学雑誌，7(3)：315-321(1996)。
- 15)古谷野亘：QOLなどを測定するための測度(2)，老年精神医学雑誌，7(4)：431-441(1996)。
- 16)池上直己、福原俊一、下妻晃二郎他：臨床のためのQOL評価ハンドブック，医学書院，2002.
- 17)鳥羽研二：高齢者の生活機能の総合的評価，新興医学出版社，2010.
- 18)石井秀宗：統計分析のここが知りたい 保健・看護・心理・教育系研究のまとめ方，文光堂，2007.